

生まれ変わった東南アジア映画

フィリップ・チア（映画評論家、「アジア千波万波」審査員）

1987年にシンガポール国際映画祭が初めて開催されたとき、アジアの映画祭といえば香港のそれが知られるばかりで、他には数える程も存在していなかった。

当時、東南アジア唯一の映画祭だったシンガポール国際映画祭のなすべきは、この地域に資するようなプラットフォームをあらためて提供することにあると思われた。域内で活動してきた重要作家たちの回顧上映が数多く行われたのは、このためだ。タイからはチャート・ソンスイー、チャートリー・チャルム・ユコン、ラット・ベスタニーといった巨匠たちが特集され、さらに新世代では、アピチャッポン・ウィーラセタクンが、彼がカンヌに取り上げられる前の2001年に、国外での初の回顧上映をこの映画祭で行っている。

リノ・ブロッカは1991年にコンペが始まった時の最初の審査員であり、後にはイシュマエル・ベルナル、マリオ・オハラ、ロックスリーなど、他のフィリピンの作家たちの回顧上映も開催されている。これ以外の地域からもP・ラムリー（シンガポール、マレーシア）、アリフィン・C・ヌール、シュマンジャヤ、ゴットト・プラコサ（以上インドネシア）といった偉大な作家たちの特集が生まれ、ヴェトナムやミャンマーの映画を概観するプログラムがそこに加わることになる。

その頃の私たちを衝き動かしていたのは、この地域が軽んじられることがあってはならないという思いだった。東南アジアの映画への関心が再び高まってくると、若い世代の監督たちがこの映画祭へ作品を送ってくるようになってきた。自分たちのための場所がここにあることが、彼らにもわかったのだ。例えば、エリック・クーがこの映画祭で初めて特集されたのは1990年であり、それは彼が初の長

篇映画『ミーポック・マン』を撮った1995年をはるかに遡る時期のことだったのである。

しかし、本当の意味での転換点はアジアのデジタル革命によってもたらされた。90年代後半までに、デジタルの新しい波が勃興してきたのだ。リリ・リザ、ナン・アハナス、ミラ・レスマナ、リザル・マントヴァニが監督に名を連ねた1999年の長篇オムニバス『Kuldesak』は、インドネシア映画の新たな波を告げるものであったし、マレーシアでもそれを追うようにして、アミール・アフマドの2000年の作品『Lips to Lips』を筆頭に、ジェームス・リー、ホー・ユーハンなどの新世代が登場する。

いまや、この地域は完全に生まれ変わったといったほうがいいかもしれない。例えば現在、フィリピンの国内年間製作本数の約半数を占めているのは、インディペンデント映画の作品だ。東南アジア随一の映画産業を誇るフィリピンは、今日この地域を先導する役割を担っており、それをインドネシアが追走している。どちらの国も長らく複数の文化が混在してきた歴史が背景にあり、そのことが新しい物語が生まれる源泉となっているのである。

ヴァーチャルな接続が可能となった新世界で、東南アジアは旧来の理念に回帰してきている。つまり、私たちは歴史においてすでに、海と人間の移動を通じてつねに繋がりをもっていたのである。昨年、リリ・リザの呼びかけで設立された東南アジア（SEA）スクリーン・アカデミーは、上映活動や監督を特別講師に迎えたワークショップを精力的に行いながら、私たちが共に分かち持つ映画の遺産の全貌を捉えようとしている。私たちが共にしてきた旅は、これからも続いていくのだ。（中村真人訳）